

南風に吹かれながら、  
ありし日の姿に思いを馳せる

「琉球王国のグスク及び  
関連遺産群」



識名園は、中国皇帝の使者である  
冊封使さつぽうしを接待する場としても使われた。

勝連城跡。国王に最後まで抵抗した按司、阿麻和利の居城だった。

抜けるような青空の下に続く白い城跡。主に石灰岩を使った野積みのづみの石垣は、構築技術が極めて高く、マチュピチュの石造技術と比較されることもあるという――。

「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」は2000年、世界文化遺産としては国内9番目の登録となりました。グスクには「城」の字が当てられますが、本土の城のように軍事拠点や居城としてだけではなく、聖地と結び付いて成り立っています。

13世紀～14世紀、按司あじと呼ばれる政治的支配者によって対立と興亡が繰り返されていた時代、各地にグスクが築かれました。世界遺産に登録されたグスクには首里城跡しゅりじょうあと、中城城跡なかくすくじょうあと、今帰仁城跡なまきじんじょうあと、座喜味城跡ざきみじょうあと、勝連城跡かつれんじょうあとがありますが、このうち最大の規模を誇るのが首里城です。

首里城は琉球王国の要となったグスク。外郭と内郭の長い城壁が複雑にはりめぐらされた中に御庭うなごと呼ばれる広場があり、この広場を囲む正殿をはじめとする主要な建物は復元されています。かつて王国の政治や行政が繰り広げられていた表舞台しょうはし。尚巴志によって琉球王国が統一されると、明国との交流が一層盛んになり、大陸からの要人も多く訪れました。そのもてなしの場となった建物は、威風堂々とした赤瓦、赤壁、朱柱に巻きつく金龍など一見すると大陸風ですが、琉球の風土や人々の嗜好にあった工夫が凝らされ、独自のものに仕上がっています。

城壁からは元や明の青磁、白磁、染付けだけでなく、大和の品々や朝鮮の高麗青磁なども大量に出土していることから、周辺の国々を結ぶ拠点として、武力よりも経済力で活発な交易を続けていた姿がうかがえます。

独自の文化が華開いた琉球王国の城壁は、明治12年、沖縄県が設置されて以降、老朽化し始めますが、「それでも、戦前はだいぶ残されていた」と聞くと悔やまれてなりません。

「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」には5つのグスクのほか、園比屋武御嶽石門そのひやんうたきいしもん、玉陵たまうどろん、識名園しきなえん、斎場御嶽せーふあうたきも登録されています。島内に散らばるこれらをすべて回るにはレンタカーが便利。短時間での観光なら、首里城周辺にある園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園を押さえておくといでしょう。王家の別邸としてつくられた識名園は、池を中心に中国様式のあずまややアーチ橋がいかにも南国らしい庭園。ゆっくり散策しながら、この地に息づく歴史と文化を感じたいものです。



参考：「Wonder沖縄」[http://www.wonder-okinawa.jp/index\\_jp.jsp](http://www.wonder-okinawa.jp/index_jp.jsp)  
「グスク紀行」（岡田輝雄著、琉球新報社、2000年）